

須坂市の読書活動

文 平 玲 子（市立須坂図書館 館長）

市立須坂図書館前史

「善光寺平の東、長野市から離ること3里、風光明媚なる臥竜山のふもと、市街整然として、雲にそびゆる煙突林のごとく、黒煙つねに冲天をただよい昼なお暗く、1,700余戸の民家8,000の人口を有し、一国消長に関する製糸業の地として、その名声天下にとどろけるの地、これを須坂町となす」 『須坂繁栄画報』冒頭の言である。刊行当時（明治41(1908)年）の須坂には、こんな風景が広がっていた。

市立須坂図書館のカウンターには、巨大な扁額が掲げられている。縦95cm、横350cm。亀田雲鵬（かめだうんぼう）の筆になる「須坂図書館」の証（あかし）である。「明治歳次癸卯（みずのと・う）」と記されていることから、当館の歴史は明治36(1903)年にさかのぼることをうかがわせるが、詳しい文献は残されていない。

市立須坂図書館は、『須坂市人物誌』（総編）や『須坂市史』など、おおかたの資料では、大正12(1923)年、皇太子御成婚記念事業として須坂町青年会が計画し、大正15(1926)年3月28日に、蔵書数2,000冊をもって須坂小学校内に開設した図書館が発展したものとされている。

ゆえに、現在、須坂市教育委員会や須坂市生涯学習スポーツ課が公開している歴史年表にも、図書館は、大正12年から登場するのである。

このすばらしい大扁額が掲げられた須坂図書館とは、どんな図書館だったのか。



わずかに『須坂市人物誌』(正編)の「葦沢義定」(あしざわぎじょう)と「青木甚九郎」(あおきじんくろう)の項にのみ記述がある。「明治36年、寿泉院内に亀田雲鵬筆の『須坂図書館』の大扁額を掲げ、有志の寄贈・委託・購入によって図書を集め、図書館を開設して青年の修養・研究に資す」。この大扁額こそ、今、私たちが朝に夕に見あげている、カウンターの扁額にほかならない。

114年前に開館した、須坂で最初の図書館。

その存在は、この大扁額が証明してくれているのに、たどりつくことができない。

わずかな資料をつなぎあわせながら、当時の図書館があった須坂のまちを、同じ時代の写真を集めた『須坂繁栄画報』の風景にかさねて見るのみなのである。

須坂藩では上屋敷が赤坂にあったため、江戸詰めの藩士の多くが、近くの「亀田塾」に学んだ。これは、江戸後期の儒学者・書家として著名な亀田鵬斎(かめだぼうさい)を初代とする学舎の流れで、2代・綾瀬(りょうらい)、3代・鶯谷(おうこく)、4代・雲鵬とつづく。文化8(1811)年、鵬斎が、旅の途中で須坂の駒澤家に逗留したり、文政12(1829)年には、須坂藩が、鵬斎の門人を藩校「立成館」の教授に招くなど、須坂藩と亀田塾には深いつながりがあった。

13代藩主・堀直虎(ほりなおとら)をはじめ、直虎とともに藩政に携わった北村方義(きたむらまさよし通称きたむらほうぎ)らも、亀田門下生として教えを受けた。須坂藩居館跡には、現在、須坂藩祖・堀直重(ほりなおしげ)と13代・直虎を祀る奥田神社が建立されている。このあたりは、町役場や図書館、公民館、警察署、消防署、教育会館、地方事務所など、古くから行政の中心となる公共機関が数多く設置されており、寿泉院も近い。

寿泉院は、延暦年間(782~805)のころ、空海が創建したと伝えられる。境内には、秀吉ゆかりの聖観音を祀った北向観世音や、豊太閣護寺仏碑、福島正則公遺蹟碑も建つ。明治36年5月、時の住職・葦沢義定が、2代目・青木甚九郎に協力して図書館を開いた。青木甚九郎といえば、東行社を創立し、水道の敷設、電話の架設など、須坂の製糸業の振興に努めた初代が高名だが、2代目・甚九郎には、豊太閣護持仏の建設、図書館の開設など、隠れた社会事業が多くある。

明治30年代末における「県下図書館開設状況」が、『長野県教育史』に掲載されている。これによると、須坂図書館は、明治36年5月設立、設置者は葦沢義定、蔵書数は3,487冊とあり、さらに、「蔵書量は、6,000冊台の中野文庫(下高井郡中野町)、5,000冊台の竜谷文庫(諏訪郡湖東村)と益友社(諏訪郡上諏訪町)、ついで3,000冊台の須坂図書館(上高井郡須坂町)の4館が断然多い」との記述もある。

当時の様子が『上高井教育のあゆみ』に紹介されている。「須坂図書館の夜学」と題する、雑誌「信濃教育」の記事である。

「本年、徴兵規定が改正され、学力検査が行われたが、上高井郡須坂町の青年は、わずかの中学卒業者を除くと、あまり成績が芳しくなかった。そこで、小学校卒業後の若者に勉強する機会がないのを憂いた有志たちが、須坂図書館規程第 7 条に基づき、本年 9 月 24 日より翌年 4 月 3 日まで、毎日午後 7 時より 9 時まで（日曜・祭日は休み）、国語、漢文、算術、倫理、実業、経済、法制等を学べるようにした。講師は、須坂小学校長・小林照三郎氏をはじめとする職員。尋常小学校卒業以上の者には、いつでも入学を許し、授業料及び会費はすべて無料。図書館の書籍を使用し、毎月の経費は日々の托鉢の金品をもって充てる予定と、葦沢義定氏は言っている」（明治 38(1905)年 7 月号）。

製糸王・越寿三郎の尽力で、須坂一帯には、明治 37(1904)年に電灯が灯った。寿泉院にも、電灯が灯っていたと考えられ、夜しか学ぶ機会のない若者たちには、かけがえのない拠り所であったことだろう。明るい光のもとで、存分に学ぶ若者たちの姿が目に見えよう。

大正 7(1918)年 5 月、葦沢義定師は、招かれて、玄照寺（小布施町）の住職となり、須坂をあとにする。名残りを惜しむ青年たちも多かったにちがいない。

その後、大扁額の見おろす寿泉院の図書館の記録は消える。

青年たちの図書館

長野県では、第 1 次大戦中のデモクラシーの風潮のなかで、青年会の自主化が全県に広まった。上高井郡下でも、青年会は全盛時代を迎え、弁論会、運動会、研究会のほかにスポーツも盛んになり、大正 13 年度からはじまった明治神宮の陸上競技大会に多くの青年が参加している。このころ、須坂町青年会は、御成婚記念図書館の設立を決議、大正 15 年 3 月に須坂図書館が開館されたとされる。

大正 13 年 1 月、第 1 回設立委員会を開いて具体案を審議。第 2 回委員会において、会員 1 名 50 銭以上の資金寄付を決定し、町会より年額 500 円を 5 年間継続して支出するとの議決も得ている。

さらに、第 1 次計画として、資金関係、小山止善文庫との合併、図書の個人寄付、館則の制定等を討議。第 2 次計画では、後援会、読書会の設立、図書館に関する思想の普及徹底、講演、図書館関係映画の上映等、第 3 次計画では、町立移管と独立図書館の建設までも審議され、自分のうち、須坂小学校の 1 室を借用することを決定したという。

昭和 14(1939)年 9 月 1 日発行の「須坂町報」には、つぎのような記事が掲載された。

町立図書館いよいよ開館、本 9 月 1 日開館式挙行、無料貸出、御利用を乞う

「従来、須坂町青年会において経営していた須坂図書館は、本年 4 月 1 日より、町立に移管、上高井教育会館（旧町役場）に一部を利用し開館することに決定し、図書の整理、その他準備を急いでいたが、館長以下職員、委員、部員も決定し、本 9 月 1 日をもって開館式を挙行し、5 日の水曜日夜より、開館することとなった。

なお、開館日及び図書貸出規程は下記の通りである。時候はいよいよ燈火親しむの候となり、料金も無料であるから、町民一般の図書館利用を切に希望いたします。

開館日（当分のあいだ）

昼間 毎月第 1、第 3 日曜 午前 9 時～午後 4 時

夜間 毎週 2 回 水曜、土曜 4 月より 9 月まで 午後 7 時～午後 10 時

10 月より 3 月まで 午後 6 時～午後 10 時まで

町立須坂図書館は、昭和 27(1952)年から 29(1954)年までのあいだに、NDC（日本十進分類法）によって図書整理を行い、従来の閉架式から、自由に図書を選択できる開架式に貸出方式をあらためるとともに、「開かれた図書館」づくりに努めた。

当時、青年団文化部の事業として、身近な生活課題について話し合う共同学習が盛んに行われていたが、須坂図書館は、昭和 30(1955)年 3 月、「読書会運動」を起こして、これらの話し合いに題材を提供し、図書館利用の拡大をはかった。使われたテキストは、『一塊の土』（芥川龍之介）、『赤蛙』（島木赤彦）、『嫁と姑の話』（和田伝）、『二匹のさば』（藤巻幸造）等の短編小説や社会時評で、毎月 1 回開催されたリーダーのための読書会には 50 名を超える参加者があったという。

読書会運動は、叶沢清介・県立長野図書館長の提唱する母親文庫運動と、小笠原忠統・松本図書館長をリーダーとする全県的な読書会運動に支えられて大いに発展した。やがて設立された須坂市読書会連絡会の主催により、昭和 32(1957)年 9 月には、須坂市立小山小学校で、200 余人が参加して、第 1 回読書会大会が開催された。

母親文庫は、昭和 33(1968)年 12 月から、婦人会の支部単位に毎月 1 回の配本を開始したことを契機に結成され、昭和 43(1968)年 7 月には市内小学校 PTA が加入して、学校単位で配本・貸出が行われ、会員は 800 名を超えた。

他市町村に先がけて設立された郷土史の研究会に「史談会」がある。これは、刀剣、陶器、太子講など、さまざまなテーマで参考図書を求めて来館した利用者たちの懇談会を、図書館が

催したことから始まった。定例研究会のほか、調査や視察など、郷土史愛好家の活動は今日にもつづいている。

高甫農村図書館

明治 40(1907)年ごろから、小学校の同窓会や青年会の事業として、各地に図書を購入して読書する巡回文庫が設置されたが、そのなかのひとつに「高甫農村図書館」があった。この図書館は、はじめ高甫文庫として村内有志の献本運動による寄贈図書をもとに、大正 10(1921)年に発足した。高甫小学校音楽室の一部に設置して、同窓会の図書係、文庫係が管理を行った。青年の希望に教育者の意見を加えて購入された図書を、貸し出しによって自宅で読むものだった。

その後、青年の読書欲が旺盛になるにつれ、独立した図書館を望む声が高まってきた。昭和 6(1931)年、高甫小学校同窓会は、発足 20 周年を記念して、既設の高甫文庫を発展させて記念図書館を建設し、農民の向学心を高め、農村文化の進展に寄与できる場をつくることを決定した。県の補助、村の援助に、同窓会会員、村内の篤志寄付者からも資金を得て、総工費 976 円で、木造 2 階建 12 坪の本館が建設された。設計は、県立長野図書館長・乙部泉三郎に依頼した。部屋の一部に一段高く畳を取りつけ、あぐらをかくにもすわるにも便利という、農村にふさわしい設計がなされ、「高甫農村図書館」と命名された。

ここで、村人たちは、年々図書を充実させて読書をかさね、昭和 11(1936)年 2 月 11 日、長野県知事より優良図書館として表彰された。昭和 30(1955)年、須坂市に合併の際は、文学書の 521 冊を筆頭に、重要図書あわせて 1.160 冊を擁して須坂図書館の管轄下に入った。

昭和 29 年 4 月 1 日、須坂市、誕生。市政施行にともない、市立須坂図書館となる。

町村合併後、市立須坂図書館は、豊洲、日野、井上、高甫の 4 地区に配本所を設けて便利をはかった。

昭和 40(1965)年 12 月に、旧市役所分室を改築して移転したが、利用者のさらなる便宜をはかるため、現在の場所に、新築・移転することになった。新図書館は、1 億 1.700 余万円の工費をかけ、昭和 56(1981)年 2 月に完成し、今日に至っている。

まぼろしの図書館

ところが、このほど、熱心な郷土史家のかたがたの尽力で、「須坂図書館設立之趣旨草案」

「須坂図書館設立趣意書」「須坂図書館規則草案」が発見された。これまで、わずかな資料から想像するしかなかったが、これら3通の書状から、まぼろしとなりかけていた「須坂図書館」の端緒が開かれた。

当時を伝える貴重な資料の一部を、現代かなづかいにあらためて紹介する。

須坂図書館設立之趣旨草案

「世上百般の図書典籍を蒐集し、広く公衆の閲覧に供するもの、これを図書館とす。図書館の一般社会の智識を開き、一国の文明を進むるにおいて、学校の具備とあいまってすこぶる緊要有効なる機関たること、広く世の人士の認識するところなり。故をもって近時各府県において、公私立図書館の設立する者、ようやく多きを加うるに至れるは社会教育進歩のため、おおいに慶嘉すべきところなり」

「明治 32 年、図書館令を發布せしが爾来各所に図書館のようやく増設あるを見るに至れり。我が信濃地方においては、松本、大町、伊那、上田、長野、中野のごときは、すでに若干の図書館を設立し、しかもその収蔵はなほだ豊富にして大いに世に便益を与えおれり。しかるに当地方いまだ一の図書館を有せず、一般読書者の不便、これより大なるはなく、また本郡教育上の一決点として世人の常に遺憾とするところなり。これここに一図書館を設立し、もって今日の必要に応ぜんとするゆえんなり。 須坂図書館」

前述の「県下図書館設置状況」には、大町図書館（明治 33 年設立、大町小学校教員設置、917 冊）、征露記念文庫（明治 38 年、上田中学校校友会、974 冊）、中野文庫（明治 35 年、小野幾之助、6,250 冊）の名が見える。伊那地方には、早くから小さな文庫が点在していた。

「須坂の地に図書館を」と熱望した有志たちの様子がうかがわれ、胸が熱くなる。

須坂図書館設立趣意書

「現代の吾人が何事を研究するにも単独でできる者はない。幾多の学説に頼り、他人の経験をもって自己の経験を補いて、もって研究を完全になし得るものである。過去の幾百年の間、古人が幾多の研究を積み、その結果を著書として残し、あるをもって吾々はこれを参考として研究に資助せるものなり。 明治参拾六年五月 須坂図書館」

須坂図書館規則

第壹條 本館は須坂図書館と称し本館を須坂町参百五拾貳番地壽泉院内に置く

第貳條……第拾八條

設立人（イロハ順）

伊藤彌一郎 小田切辰之助 小田切新蔵 小田切啓蔵 小布施辰三郎 大峽荒治
 大久保賢繁 渡邊金三郎 吉澤亀太 田中新十郎 田中新蔵 高橋庄右衛門 高津珉恭
 千野一凹 土屋音八郎 中澤吉四郎 中村三折 中島訥次郎 中島照十 中村伊平太
 浦野安井 野平道周 山下八右衛門 山下條三郎 牧新七 藤井兼栄 越壽三郎
 小林練吉 小林太兵衛 青木甚九郎 荒井林右衛門 葦沢義定 澤村勘七 持田徳三郎

須坂の繁栄を支えた名士たちが名を連ねている！

次代を担う若者を育てようと、まちをあげて成しとげた様子がうかがえる。

須坂図書館規則草案

第1章 総則

壹、綱領 本館は征露記念として大いに改善し軍国の目的に適わんため、教育普及に公益を与えんため、慈善教育の方針より、学資不足のため、就学年の長きため、身体羸弱のため、諸種業務のため、家事都合のため、志願の学校にだも入学すること能わずして、やむをえず廃学する不幸有為の青年の福利をはかるため、貴賤貧富老若男女を問わず、無料にて所蔵の図書を随意に閲覧または借覧の自由を得せしめんために、文学、実業、教育、経済、宗教、法制、医学、理化学、その他百般の學術技芸に関する普通有益を図書および新聞雑誌統を蒐集し、なお新刊書の有益なるものはなるべく速やかにこれを備え広く公衆の閲覧に供して一般社会の智識啓発に補するを目的としてこれが実施を企図するにあり。

貳、名称 須坂図書館と称す。

参、須坂町壽泉院境内に設く。

四、管理 須坂図書館主事をもってこれに充つ。

五、維持 有志者の寄付金、寄贈図書をもって維持するものとす。

六、時間 毎日午前八時より午後五時まで縦覧することを得。

ただし資金の総額にしたがい學術講習のため夜学会を開始すべし。

第2章 閲覧注意要項

七、閲覧 本館の図書を閲覧または借覧せんと欲するものはすべて無料とす。

八 貸与 図書は館員に限り1人1部ずつ10日以内をもって貸与することを得。

ただし2回以上の継続供用するを許さず。

九……十六 明治三十六年五月十七日創立 明治三十八年三月改正 須坂図書館」

日露戦争の戦勝記念として、改正がなされたか。目的がより具体的になっている。

先に紹介した記事「須坂図書館の夜学」中の、「須坂図書館規程第7条に基づき……」は、この「七、閲覧」のことと思われる。貴賤貧富老若男女を問わず無料で利用できた。

篤い志によって掲げられた須坂図書館の大扁額が、その後、どのような変遷をたどって青年たちの図書館へ引き継がれていったのか。そこは、まだ、解明されていない。

ひきつづき資料収集に努め、ふるさとの図書館のルーツをさぐってまいりたい。

「今」の図書館

35年を経て、外観はかなり風格が現れた市立須坂図書館だが、一步入れば、今も変わらず「須坂図書館」の大扁額に見守られ、日々新しい工夫と読書活動が行われている。

平成26(2014)年より、公式キャラクターの「ぶっくるー」を用いて、館内の掲示物や印刷物に統一感を持たせ、親しみのある図書館をアピールしている。職員のエプロンにも「ぶっくるー」の刺しゅうが輝く。

平成27(2015)年度に実施したトイレの改修では、子ども用の低い便座の個室に、「ひとりでできるかな?」と見守る「ぶっくるー」をディスプレイし、評判になった。多目的トイレではじめた「ぶっくるー川柳」がきっかけとなり、須坂新聞社との共同企画「ほのぼの川柳 ほくしん流」に発展した。

ほのぼの川柳 ほくしん流

2か月にいちど、お題を決めて、選評会を行う。入選作品は須坂新聞で発表し、当館に掲示。毎回100を超える作品が集まる。クラス単位で取り組む小学校もでている。秋の読書週間には、利用者の投票で上半期最優秀賞を決定した。

すぎかびとの本

須坂市民や須坂市出身のかたがたを「すぎかびと」と呼んで、その著書を集め、市民に公開し、貸し出している。

郷土の歴史に深くかかわった先人や、現在多方面で活躍中の「すぎかゆかりびと」の著作や資料も積極的に収集している。

「すぎかびとカード」は、ふるさとの発展につくしたひとびとの軌跡をまとめた、ハンディな歴史カード。小学校中学年から理解できるよう、やさしく編集して、配布している。

『須坂小唄』や神楽、獅子舞、木遣り唄など、古くから伝わり現在も息づいている「すぎかびとの音」もたいせつな文化財や資料であるとらえ、収集・貸出を行っている。

音訳ボランティア・須坂あかりの会の協力で、オリジナル CD「県歌『信濃の国』を楽しむ」も完成した。

信州須坂どこでも図書館

平成 25(2013)年度から、お店やオフィスの一角に小さな本のコーナーをつくり、訪れた人との交流を楽しむ新たな読書推進の拠点を「信州須坂どこでも図書館」と呼んで、参加者を募っている。

「信州須坂どこでも図書館」の目じるしは、ぬくもりあふれる木の看板。参加者には、屋外に看板を掲げて、本とコミュニティの場を提供してもらおう。地域公民館や美術館、保健センターなどの公共施設のほか、駅、病院、店舗などが参加。今、須坂市内には、50 を超すお店や施設の軒先に看板がゆれている。

これからも、市立須坂図書館では、本があふれるまちをめざして、「信州須坂どこでも図書館」を支援し、読書活動の推進と、まちの活性化をはかっていく。

ブックリサイクル

「読まない本を、読みたい人へ」を合言葉に、市立須坂図書館の玄関にリサイクルボックスを常設、年間を通じて不要になった本を受けつけている。市民から寄せられた本と当館の除籍図書をあわせて開催する「ブックリサイクル市」は、秋の読書週間の恒例行事になっている。

障がい者サービス

音訳ボランティア・須坂あかりの会の協力で、視覚障がい者にも読書の楽しみを届けている。「助け合い起こしすぎか」(社協報、毎月1回)、「須坂新聞」(抜粋、毎号)など、タイムリーな地域の情報を CD に納め郵送している。須坂あかりの会は、その献身的な活動が認められ、「長野県知事賞」「長野県社会福祉協議会会長賞」など数々の賞を受賞している。

おはなしの会

毎週土曜日、午前 11 時より、登録ボランティアのみなさんによる「おはなしの会」を開催。「おはなしポイントカード」を配布して、継続参加と家庭での読書の定着をはかっている。「新春こどもコンサート」「おはなしでんしゃ」「親子七夕まつり」「おはなしびっくり箱」「こどもクリスマス会」など、季節にあわせたイベントも充実させている。

「お話ボランティアの部屋」には、大型絵本や大型紙芝居、あわせて 200 冊を収蔵している。紙芝居は、幼児向けから高齢者向けまで、1500 以上の作品を幅広く収集。舞台(紙芝居・パネルシアター)、照明、拍子木なども貸し出し、読書の普及に努めている。

おとなのための朗読会

子どものための「おはなしの会」だけでなく、おとなには「おとなの朗読会」を。読み聞かせの盛んな須坂市には、実力ある読み手が多数おり、春と秋に、選りすぐりの文学作品をたっぷり聴かせる朗読会が定着している。聞き手も、遠方から本を聴きにやってくる。

須坂市子ども読書活動支援研究会

須坂市子ども読書活動推進計画に基づいて、子どもの読書活動の推進を目的に、須坂市内に拠点を置き、幼稚園、保育園及び小・中学校、図書館等で活動する読書活動支援団体が、ネットワークをつくって、熱心に活動している。読み聞かせにとどまらず、講演会や研修会などの事業も数多く主催。地域の読書活動の底上げに大きな力を発揮し、平成 27 年度子どもの読書活動優秀実践団体の部において「文部科学大臣表彰」を受賞した。

「すぎかしどうぶつえんかるた」(平成 25 年度地域発元気づくり支援金活用事業優良事例「長野県知事表彰」)、すぎかしどうぶつえんえほん『トットトト フンボルトペンギントットの冒険』の制作&販売など、ユニークな取り組みでも知られる。

すぎか子ども読書ちゃれんじ

須坂市は、平成 23(2011)年度より、「すぎか子ども読書ちゃれんじ」を開始。須坂市子ども読書活動推進計画に基づき、子どもの読書活動を推進するため、家族と学校が一体となって楽しく読書活動に取り組めるよう、よりよい環境づくりと継続的な支援を行っている。

親子読書をすすめ、読書を通じたコミュニケーションをはかる「幼児版」や、読書が苦手な児童にも読書を楽しむきっかけを与える「小学生版」、中学生には、平成 28(2016)年度から「やってみよう！ 聞いてみよう！ ビブリオトーク」を開催するなど、年齢や学年に応じた支援を行っている。

毎年、子ども読書の日(4月23日)からスタートし、1年間に読んだ本のポイントをためて、殿堂級に認定されると市長から表彰がある。秋の読書週間には、児童から寄せられた本のコメントを、市のホームページで紹介したり、本の帯にして市立須坂図書館で展示している。

信州岩波講座

平成 11(1999)年から、須坂市で毎年開かれている市民向けの公開講座。須坂市、岩波書店、信濃毎日新聞社の 3 者の枠組みを基礎に、市民グループ「ふおらむ集団 999」が中心となって、「市民性」を育み、「市民文化」を創造することを目的として行われている。

信濃毎日新聞社と岩波書店は、岩波書店の創業者が長野県の出身であることや、岩波書店の前社長が信濃毎日新聞の常設コラムを執筆するなど、絆を深めてくるなかで、若者のなかに本も新聞も読まない層が増えていることを深刻な事態ととらえていた。共通の問題意識を持つ両社の有志の輪が広がって、東京、長野、須坂からも参加するようになり、これが市民グループ「ふおらむ集団 999」の母胎となった。こうした背景と準備活動のなかから須坂市の事業として設定された。

第 1 回以来、その時どきの時代や状況に即して、社会と市民のかかわりのなかからテーマを選び、講座会場でのアンケートやインターネットなどを通して集まった市民の意見も反映させて講師を決定してきた。第 18 回信州岩波講座 2016（平成 28）は、「私が考え選ぶ明日」を基本テーマに 3 講座が行われ、高橋源一郎氏（作家・明治学院大学教授）、佐藤優氏（作家・元外務省主任分析官）、中野晃一氏（上智大学教授）、谷口真由美氏（大阪国際大学准教授・全日本おばちゃん党代表）が熱弁をふるった。

信州岩波講座には「高校生編」もある。平成 13(2001)年より、信州岩波講座実行委員会のサポートのもと、高校生が自主的に社会活動に参加し体験することを目的として発足。須坂市内の 4 校の高校生が運営委員会をつくって参画している。今回は、運営委員会の希望から「ゲド戦記」の翻訳家・清水真砂子氏（青山学院女子短期大学名誉教授）を招き、講演を聞いた。ポスター・チラシの制作、チケットの配布、当日の会場づくりも高校生が担当。講演終了後の講師との交流会も楽しんだ。

信州岩波講座実行委員会では、活字文化の活性化と擁護を目的に、毎年、須坂市の読み聞かせ団体等に児童図書を送贈しており、須坂市のボランティアの活動意欲とともに、子どもたちの読書意欲は確実に高まってきている。

信州大学附属工学部図書館との連携協力協定

平成 26(2014)年度より、信州大学附属工学部図書館と市立須坂図書館は連携協力協定を結んでいる。これにより、市立須坂図書館利用登録者は、信州大学全学部の図書館に所蔵する図書を、市立須坂図書館を通じて借りることができるほか、工学部図書館とは、お互いの図書館で、借りたり返したりが可能になった。

市立須坂図書館は、専門分野の資料はすくないが、小説や実用書、旅行のガイドブックなど、大学図書館にはない図書が充実している。ホームページからの蔵書検索も簡単なので、貴学にない本は、ぜひ、ご利用をお願いしたい。

平成 28 年 11 月には、米子瀑布群名勝指定を記念して、信州大学教育学部准教授・竹下欣宏先生に、「地形と地質が語る米子瀑布群の生い立ち」と題してご講演いただき、秋の読書週間に花を添えていただいた。この場を借りてあらためてお礼申しあげ、今後の末の永い連携を願う。

最後に。市立須坂図書館では、平成 28(2016)年 4 月より、毎日、学生が利用する 2 階の読書室にかぎり、時間を決めて軽食をとれる「ランチタイム」をはじめた。「狭い」「場所がない」「図書館は飲食をするところではない」と考えるのではなく、週末や夏休みに試行し、アンケートをかさねて、ルールを変えたのである。受験生や、長時間滞在する利用者には、おにぎりやサンドイッチなどの軽食をとって、また午後もがんばっていただけるようになった。

それを機に、学生の動線も見直した。階段の踊り場を活用した「進学・就職支援コーナー」、読書室の入り口付近には、掲示板や「YA（中・高校生）コーナー」も新設でき、図書館の「応援する」姿勢の「見える化」がはかられた。受験シーズンには、職員が、折り紙でオリジナルのお守りをつくって配布したところ、意見箱に、「合格しました」「ご利益すごい」などと投函されるようになったなどの、ほほえましいエピソードもある。

これらは、すべて、あの古い図書館からつづいているものである。若者を育てる図書館、学ぼうとする者をあたたかく見守る図書館、小さいけれど大きな志の図書館。どれも変わらない須坂図書館の姿である。私たちは、これからも、ここで市民を応援し、市民から応援される図書館になっていきたいと願っている。

参考文献

- 『須坂繁栄画報』1908、和久井孝治郎、進成館
- 『高甫村誌』1960、高甫村誌編纂委員会
- 『須坂市人物誌』1966、須坂市人物誌編集委員会
- 『須坂小学校百年史』1973、須坂小学校百年史刊行会
- 『須坂市史』1981、須坂市史編纂委員会
- 『長野県教育史 第2巻、総説編2』1981、長野県教育史刊行会、
- 『百周年記念誌 上高井教育のあゆみ』1985、上高井教育会
- 『北村方義 堀直虎の側近として活躍した偉大な須坂藩士の足跡』2016、須坂市立博物館